ものと、s の字形を用ゐられたものと混ぜられて居るやうな有様であるので、確實に何れとも定め難いところから、愼重の態度を執つて、Kui と Kü とは兩様の讀み方を付し、s と ś とはそれそれ字形に從つてその音を寫したが爲に外ならぬ。さてミュラーはこの名をトルコ語の三種の佛典の奥書の中から見出した。その第一には「此の經を Kuisan (Küsän) の語から Barčuq の語＝ミュラー氏はトルコ語の義と説明して居る＝に譯した」とあり、第二には「また四 Kuisan (Küsän) の學者の國に」云々とあり、第三には前記の如く「Kuišan (Küšän) の語から Toγrï (即ちトクハラ) の語に譯し、Toγrï の語から新たに Türk の語に譯した」云々と記されて居るのである。第一と第三とはムルックから、第二はセンギムから出土した文書である。氏はこの新に知られた國名を Kusana 即ち所謂ガンダーラ地方、カブールの谷間の地方を指したものと見るべきであるといひ、今日までのところでは、西藏語・漢語・トクハラ語及びこの Kuišan (Küšän) 語などから譯出されたウイグル文の佛典が現存すると說いた。前述のやうに ārši を月氏と見、トクハラ語の別名を ārši 語と見、また貴霜王國を月氏の建てたものと見てゐるミュラー氏としては、Kuišan (Küšän) 即ち貴霜の語からトクハラ語に譯したとあるこの第三の跋文については、少くとも或る程度の説明を加へて置くべき必要があると思ふが、それは兎も角もとして、かく Kuišan (Küšän) Kuisan (Küsän) 等の名を貴霜と解釋して、果して現存する新疆出土のトルコ文書に見えるこの名を差支無く解釋し得るであらうか。ミュラー氏の解釋の當否を判斷する前に、余は先づ上記の氏によつて紹介された三文書以外に、別にこの名を有する同地方出土のトルコ文書二種を紹介しなければならぬ。

その第一はツルファンから出土し、曾て此の地方に在任した王樹枏氏の藏したもので、今現に我が京都帝國大學